ブルジョア階級にたいする全面的独裁について

張　春　橋

ブルジョア階級にたいする全面的独裁について

張　春　橋

外文出版社
北京

毛主席のことば

レーニンはなぜブルジョア階級にたいして独裁をおこなうといったのか、この問題をはっきりさせなければならない。この問題をはっきりさせなければ、修正主義に変わってしまう。全国に理解させなければならない。

毛主席のことば

いまわが国でおこなわれているのは商品制度であり、賃金制度も不平等で、八級賃金制が存在している、などなど。これらはプロレタリア階級独裁のもとで制限を加えるほかはない。だから、林彪のたぐいが登場すれば、資本主義制度を実行するのはきわめて容易である。したがって、マルクス・レーニン主義の著作を、もっと読むようにしなければならない。

毛主席のことば

レーニンは「小生産は、資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしている」とのべている。労働者階級の一部、党員の一部にも、このような状況が存在している。プロレタリア階級のなかにも、機関の工作要員のなかにも、ブルジョア的生活作風にそまるものがいる。

ブルジョア階級にたいする
全面的独裁について

張春橋

プロレタリア階級独裁の問題は、長年らい、マルクス主義と修正主義との闘争の焦点になってきた。レーニンは「**階級闘争を承認し、同時にプロレタリア階級独裁を承認するものだけが、マルクス主義者である**」とのべている。毛主席が全国に、プロレタリア階級独裁の問題をはっきりさせなければならない、と呼びかけたのも、われわれが理論の面でも実践の面でもマルクス主義をやり、修正主義をやらないようにさせるためにほかならない。

われわれの国家は、いま重要な歴史的発展の時期におかれている。二十余年にわたる社会主義革命と社会主義建設を経て、とりわけプロレタリア文化大革

命を経て、劉少奇、林彪の二つのブルジョア階級司令部をたたきつぶし、われわれのプロレタリア階級独裁はかつてなく強固になり、社会主義事業は活気にみちて繁栄している。いま、全国人民は闘志をたぎらせ、決意を固めて、今世紀のうちにわが国を社会主義の強国にきずきあげようとしている。この過程で、また社会主義の全歴史的段階で、終始、プロレタリア階級独裁を堅持することができるかどうかは、わが国発展の前途にかかわるもっとも大きな事柄である。現実の階級闘争も、われわれがプロレタリア階級独裁の問題をはっきりさせることを要求している。毛主席は、**「この問題をはっきりさせなければ、修正主義に変わってしまう」**とのべている。少数の人にはっきりさせるだけでは駄目で、かならず**「全国に理解させなければならない」**のである。今回の学習をりっぱにおこなうことの現実的、長期的意義は、どのように高く評価しようとも、高すぎることはない。

早くも一九二〇年、レーニンは偉大な十月社会主義革命と最初のプロレタリ

ア階級独裁国家の実践的経験にもとづいて、つぎのように鋭く指摘した。「プロレタリア階級独裁は、より強大な敵、すなわちブルジョア階級にたいする新しい階級のもっとも決然とした、もっとも仮借ない戦いであって、ブルジョア階級の反抗は、かれらが打倒される（たとえ一国内であれ）ことによって十倍にも兇暴になる。かれらの強大さは、国際資本の力、かれらのもつさまざまな国際的連係の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小生産の力にもある。なぜなら、小生産は残念ながら、いまなお、この世におびただしくのこっていて、この小生産が資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしているからである。これらすべての理由によって、プロレタリア階級独裁は必要なのである」、と。レーニンはまた、この独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいするねばり強い闘争であり、それには流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済的なものも、教育的なものも行政的なものもあり、それはブルジョア階

級にたいする全面的独裁である、と指摘している。レーニンはさらに、ブルジョア階級にたいし長期にわたる全面的独裁をおこなわなければ、ブルジョア階級にうち勝つことはできない、とくりかえし強調した。レーニンのこれらの言葉、とりわけレーニン自身が傍点をうった言葉は、すでにその後の実践によって立証されている。新しいブルジョア階級が、果たしてつぎつぎに生まれてきた。フルシチョフ、ブレジネフ裏切り者集団こそ、かれらの代表者にほかならない。この連中は、一般的に家庭出身がよく、そのほとんどは赤旗のもとで育ったものであり、組織的には共産党に加入し、そのうえ大学教育を受けて、いわゆる赤色専門家になったものである。しかし、かれらは資本主義のふるい土壌から生みだされた新しい毒草であり、自己の階級を裏切り、党と国家の権力をのっとり、資本主義を復活させ、プロレタリア階級に独裁をおこなうブルジョア階級の頭目となり、ヒトラーさえやろうとしてやれなかったことをやってのけたのである。この「衛星は天上に打ち上げられたが、赤旗は地上に倒れ

た」という歴史の教訓を、われわれはいついかなる場合も忘れてはならず、とくに強大な国家をきずきあげる決意を固めたときそれを忘れてはならない。

冷静に見ておかなければならないのは、中国には修正主義に変わる危険性が依然として存在することである。なぜなら、帝国主義、社会帝国主義がわれわれを侵略、転覆することを片時も忘れておらず、ふるい地主・ブルジョア階級の人間が生きのこっており、野心をすてていないばかりでなく、新しいブルジョア分子がちょうどレーニンののべたように毎日、毎時間、**生まれている**からである。一部の同志は、レーニンがのべたのは協同化以前の状況である、といっている。これは、明らかに誤っている。レーニンの言葉は時代遅れではない。これらの同志は、毛主席が一九五七年に発表した『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』を一読するがよい。毛主席はこの著作のなかで、わが国における、協同化をふくめた社会主義的改造が所有制の面で基本的勝利をおさめたあとも、依然として階級、階級矛盾、階級闘争が存在し、生産関係と

生産力のあいだ、上部構造と経済的土台のあいだの照応しながらも矛盾しあっている状況が存在することを具体的に分析している。毛主席はレーニン以後のプロレタリア階級独裁の新しい経験を総括して、所有制の変革以後にあらわれたさまざまの問題に系統的な回答をあたえ、プロレタリア階級独裁の任務と政策を規定し、党の基本路線とプロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の理論基礎を定めた。十八年らいの実践、とりわけプロレタリア文化大革命の実践は、毛主席の提起した理論、路線、政策がまったく正しいものであることを立証している。

毛主席はさいきん、「**要するに、中国は社会主義国家に属する。解放前は資本主義とほぼ同じであった。いまでも八級賃金制、労働に応じる分配、貨幣による交換がおこなわれている。これらは旧社会と大して変わらない。異なっているのは所有制が変わったことである**」とのべた。毛主席の指示をさらに深く理解するために、われわれはわが国における所有制変革の状況を見、一九七三

年の各種経済部門のわが国工業、農業、商業における比率を見てみようではないか。

まず工業について見よう。全人民的所有制の工業は、工業固定資産全体の九七パーセント、工業従業員数の六三パーセント、工業総生産額の八六パーセントを占めている。集団的所有制の工業は、固定資産の三パーセント、従業員数の三六・二パーセント、総生産額の一四パーセントを占めている。このほかに、従業員数の〇・八パーセントを占める単独経営の手工業が存在する。

つぎに農業について見よう。農業生産手段のうち、耕地、排水・灌漑機械の約九〇パーセント、トラクター、大家畜の約八〇パーセントは集団的所有に属しており、全人民的所有制の占める比率はひじょうに小さい。したがって、全国の食糧と各種工芸作物は、その九〇パーセント以上が集団経済によって生産され、国営農場の占める比率はきわめて小さいのである。このほか、わずかな公社員の自留地と家庭副業がまだ保留されている。

さらに商業について見よう。国営商業は商品小売総額の九二・五パーセント、集団的所有制商業は七・三パーセントを占め、単独経営の小商人は〇・二パーセントを占めている。このほか、農村にはまだ相当数の市交易が保留されている。

前記の数字からも分かるように、社会主義の全人民的所有制と勤労大衆による集団的所有制は、わが国で確かに偉大な勝利をおさめた。全人民的所有制がひじょうに大きな優位を占めるようになったばかりでなく、人民公社経済における人民公社、生産大隊、生産隊三級の所有にも、相互の比率に一定の変化が起きている。上海市郊外区を例にとってみると、一九七四年、人民公社クラスの所得が総所得に占める比率は、前年の二八・一パーセントから三〇・五パーセントに、生産大隊のそれは一五・二パーセントから一七・二パーセントにそれぞれ上昇し、生産隊は五六・七パーセントから五二・三パーセントに低下した。その結果、規模が大きく、集団化の程度が高いという人民公社の優位性が

いっそう明らかになった。この二十五年らい、われわれが帝国主義的所有制、官僚資本主義的所有制、封建主義的所有制をしだいに廃絶し、民族資本主義的所有制、単独で労働にたずさわる者の所有制を一歩一歩改造して、社会主義の二種類の共有制でこの五種類の私有制に逐次とってかわらせたため、わが国の所有制はすでに変革され、わが国のプロレタリア階級と勤労人民は基本的に私有制の鉄鎖から脱け出し、わが国における社会主義の経済的土台は一歩一歩強固になり発展している、と誇りをもって言うことができる。第四期全国人民代表大会で採択された憲法は、われわれのおさめたこれらの偉大な勝利を明文化している。

しかし、われわれは、所有制の面において、問題がまだ完全に解決されていないことを知らなければならない。われわれがしばしば口にする所有制の「基本的解決」とは、問題がまだ完全に解決されておらず、所有制の範囲内でもブルジョア的権利が完全に廃絶されていないということである。前記の数字を見

ても分かるように、工業、農業、商業のいずれにも、まだ部分的な私有制が残っており、社会主義の共有制もすべてが全人民的所有制というわけではなく、二種類の所有制があり、全人民的所有制は国民経済の基礎としての農業の面で、まだきわめて薄弱である。マルクス、レーニンが想定した、社会主義社会では、ブルジョア的権利が所有制の範囲内においてすでに存在していないというのは、すべての生産手段が社会全体の所有になった状態を指している。われわれは、明らかにまだここまでは到達していない。われわれは理論的にも実践的にも、プロレタリア階級独裁がこの面でなおひじょうに困難な任務を負っていることを無視してはならない。

われわれはまた、全人民的所有制にせよ、集団的所有制にせよ、いずれも指導権という問題、つまり、名義上ではなく事実上、どの階級によって所有されているかという問題をかかえていることを知らなければならない。

毛主席は一九六九年四月二十八日、党の九期一中総で、つぎのようにのべている。「見たところ、プロレタリア文化大革命はどうしてもやらなければだめである。われわれのこの土台は固まっていない。わたしの観察によると、全体とはいわないが、圧倒的多数ともいわないが、おそらくかなり大きな数にのぼる工場では、指導権が真のマルクス主義者の手に、労働者大衆の手に握られていなかった。以前工場を指導していた者のなかに、よい人間がいなかったというのではない。よい人間はいた。党委員会書記、副書記、委員にはみな、よい人間がいたし、支部書記にもよい人間がいた。しかし、かれらは以前劉少奇の路線にしたがって、物質による刺激、利潤第一などをやったり、プロレタリア階級の政治を提唱せずに奨金制をおこなったりしたまでである。」「だが、工場には確かに悪い人間がいる。」「これは革命がまだ終わっていないことを示している。」毛主席のこの言葉は、プロレタリア文化大革命の必要性を明らかにしているばかりでなく、所有制の問題については、他の問題と同じように、その形式だけを見てはならず、その実際の内容をも見なければならないという

ことを、われわれに比較的はっきりと認識させた。所有制が生産関係のなかで決定的な役割を果たしていることを重視するのは、まったく正しい。しかし、所有制が形式的に解決されたのかそれとも実際に解決されたのかという問題を重視せず、生産関係のもう二つの側面、つまり人と人との相互関係と分配形式が所有制に反作用をおよぼし、上部構造も経済的土台に反作用をおよぼすこと、しかもいずれも一定の条件のもとで決定的役割を果たすことを重視しなければ、それは誤りである。政治は経済の集中的な現われである。思想面、政治面での路線が正しいかどうか、指導権がどの階級の手に握られているかは、これらの工場が事実上、どの階級の所有に属しているかを決定するものである。同志諸君はふり返ってみるがよい。官僚資本または民族資本の企業が、どのようにして社会主義の企業に変わったのか。それは、われわれが軍事管理代表あるいは政府側代表を企業に派遣し、党の路線と政策にもとづいてそれを改造したからではないのか。歴史上、いかなる所有制の大変革——封建制が奴隷制に

とってかわった場合にせよ、資本主義が封建主義にとってかわった場合にせよ——も、まず権力を奪取し、それから権力の力を運用して所有制を大規模に変革し、新しい所有制を強固にし、発展させてきたのである。社会主義の共有制はブルジョア階級独裁のもとで生まれることができない以上、なおさらこのようにしなければならない。旧中国で、工業の八〇パーセントを占めていた官僚資本は、人民解放軍が蔣介石をうち破ったのち、はじめてこれを改造し、全人民的所有にすることができたのである。同様に、資本主義の復活も、必然的に、まず指導権を奪取し、党の路線と政策を変えるものである。フルシチョフ、ブレジネフはこのようにしてソ連の所有制を変えたではないか。劉少奇、林彪も程度の差こそあれ、このようにしてわれわれの一部の工場・企業の性質を変えたではないか。

さらに、われわれが現在おこなっているのは商品制度であるということを知らなければならない。毛主席はつぎのようにのべている。「**いまわが国でおこ**

なわれているのは商品制度であり、賃金制度も不平等で、八級賃金制が存在している、などなど。これらはプロレタリア階級独裁のもとで制限を加えるほかはない。だから、林彪のたぐいが登場すれば、資本主義制度を実行するのはきわめて容易である」、と。毛主席の指摘したこのような状態は、短期間では変えることができない。人民公社、生産大隊の二クラスの経済が比較的早いテンポで伸びている上海郊外区の人民公社を例にとってみると、三クラスの所有する固定資産は、人民公社が三四・二パーセント、生産大隊がわずかに一五・一パーセントを占めるにすぎず、生産隊が依然として五〇・七パーセントを占めている。したがって、生産隊を基本的採算単位とするところから、生産大隊を採算単位とするところまで移行し、さらに人民公社を採算単位とするところまで移行するには、人民公社自身の経済条件だけからみても、まだ相当長い期間を必要とする。たとえ人民公社を採算単位とするところまで移行したとしても、それはやはり集団的所有制である。だから、短期間内は、全人民的所有制

と集団的所有制という二つの所有制が並立する局面に根本的な変化が起こることはあり得ない。しかもこの二つの所有制が存在するかぎり、商品生産、貨幣による交換、労働に応じる分配は避けられない。「**これらはプロレタリア階級独裁のもとで制限を加えるほかはない**」のであり、したがって都市、農村の資本主義的要素の発展、新しいブルジョア分子の出現も避けられない。もし制限を加えないなら、資本主義とブルジョア階級はよりはやく発展してくるであろう。そのため、われわれは所有制改造の面で偉大な勝利をおさめたからといって、またプロレタリア文化大革命をおこなったからといって、けっして警戒心をゆるめてはならない。われわれの経済的土台はまだ強固なものではなく、ブルジョア的権利は所有制の面でまだ完全にはなくなっておらず、それは、人と人との相互関係の面にまだ大きく存在しており、分配の面では依然として支配的地位を占めているということを知らなければならない。上部構造の諸領域において、一部の分野は事実上、やはりブルジョア階級に握られており、ブルジ

ョア階級がまだ優位を占めている。一部はいま改革中であるが、改革の成果もまだ強固ではなく、ふるい思想、ふるい習慣の力がいまなお社会主義の新しい事物の成長をかたくなにはばんでいる。都市、農村の資本主義的要素の発展にともなって、新しいブルジョア分子がつぎつぎに生まれており、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだの階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、なお長期にわたる、曲がりくねったものであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。たとえふるい世代の地主・ブルジョア階級が死に絶えたとしても、こうした階級闘争はけっしてやむことはなく、林彪のたぐいの人物が登場すれば、ブルジョア階級の復活はやはり起こり得るのである。毛主席は『抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針』という談話のなかで、一九三六年、党中央の所在地、保安の近くに土塀がこいの部落があり、そのなかにひとにぎりの武装した反革命分子がたむろしていたが、かれらはあくまで降伏せ

ず、赤軍が突入してはじめて問題は解決されたとのべている。この事件は普遍的な意義をもっている。それは、われわれに「**すべて反動的なものは、たおさないかぎり、たおれはしない。これも掃除とおなじで、ほうきがとどかなければ、ごみはやはりひとりでに逃げはしない**」ということを教えている。現在、ブルジョア階級の土塀部落はまだたくさんあり、一つつぶしても、また別のものがあらわれる。たとえ、それがつぎつぎにつぶされて、最後に一つしか残らなくなっても、プロレタリア階級独裁の鉄のほうきがとどかなければ、それもひとりでに逃げはしない。レーニンは、「**これらすべての理由によって、プロレタリア階級独裁は必要なのである**」といっているが、それはまったく正しい。

歴史の経験がわれわれに教えているように、プロレタリア階級がブルジョア階級にうち勝つことができるかどうか、中国が修正主義に変わるかどうかのカギは、われわれがすべての領域で、また革命発展のすべての段階で、終始ブル

ジョア階級にたいする全面的独裁を堅持することができるかどうかにある。ブルジョア階級にたいする全面的独裁とはなにか。もっとも簡単に概括すれば、それはわれわれがいま学習中の、マルクスが一八五二年、ヴァイデマイアーにおくった書簡のなかのひとくだりの言葉に帰するであろう。マルクスはのべている。「近代社会における諸階級の存在を発見したのも、諸階級相互間の闘争を発見したのも、別にわたしの功績ではない。わたしよりもずっとまえに、ブルジョア歴史学者たちはこの階級闘争の歴史的発展をのべていたし、ブルジョア経済学者たちは諸階級にたいして経済的解剖をおこなっていた。わたしが新しくやったことは、つぎの点を証明したことである。（一）諸階級の存在は、生産の特定の歴史的発展段階だけにむすびついたものであるということ、（二）階級闘争は、必然的にプロレタリア階級独裁へみちびくということ、（三）この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである」、と。レーニンは、マルクスの

このみごとな論述は、マルクスの国家学説とブルジョア階級の国家学説との主要な、根本的な差異をきわめて鮮かにえがき出しており、マルクス国家学説の本質を明らかにしている、とのべている。ここで注意をはらわなければならないのは、マルクスがプロレタリア階級独裁にかんする前記の言葉を三つの点に分けていることである。この三つの点は互いに連係しており、切り離すことのできないものである。そのうちの一つの点だけをとりあげて、他の二つの点を無視するようなことがあってはならない。なぜなら、この言葉は、プロレタリア階級独裁の生成、発展、消失の全過程を完全にあらわしており、そのなかにはプロレタリア階級独裁のすべての任務と実際的内容がふくまれているからである。『フランスにおける階級闘争　一八四八年から一八五〇年まで』のなかで、マルクスはより具体的にこうのべている。この独裁は、いっさいの階級差異の廃絶に、階級差異の基礎であるいっさいの生産関係の廃絶に、これらの生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃絶に、そしてこれらの社会関係から

生じる**いっさいの観念**の変革に到達するための必然的な過渡的段階である、と。ここでマルクスがのべているのは**いっさい**であり、四つとも**いっさい**である。部分でもなく、大部分でもなく、また圧倒的部分でもなくて、全部なのである。これはなにも不思議なことではない。プロレタリア階級は全人類を解放してはじめて、最終的に自らを解放することができるのである。このことをなしとげるには、ブルジョア階級にたいし全面的独裁をおこない、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命を最後までおしすすめ、最終的には地球上からこの四つの**いっさい**を廃絶して、ブルジョア階級とすべての搾取階級が存在することもできなければ、ふたたび発生することもできないようにするほかなく、けっして**移行**の途上で歩みをとどめてはならない。われわれは、このように理解してはじめて、マルクスの国家学説の本質を会得したといえる、と考えている。同志諸君に考えてもらいたい。もしこのように理解せず、また理論的、実践的にマルクス主義を限定し、切りちぢめ、歪曲し、プロレタリア階級独裁を

空談義に終わらせ、ブルジョア階級にたいする全面的独裁の穴だらけの不完全なものにし、いっさいの領域で独裁をおこなうのでなく、一部の領域でだけ独裁をおこない、いっさいの段階で独裁をおこなうのでなく、ある段階（例えば所有制改造以前の段階）でだけ独裁をおこなうなら、つまりブルジョア階級のいっさいの土塀部落をすっかりうちこわさないで、その一部を残して、かれらがふたたび隊列を拡大するのを許すなら、それはブルジョア階級復活の条件を準備することになるではないか。また、それはプロレタリア階級独裁を、ブルジョア階級を保護するもの、とりわけ新しく生まれたブルジョア階級を保護するものに変えることになるではないか。ふたたび苦難の生活をおくることを望まないすべての労働者、貧農・下層中農とその他の勤労人民、共産主義の実現のために一生奮闘するという決意を固めているすべての共産党員、中国が修正主義に変わることを望まないすべての同志たちは、みなマルクス主義のつぎの基本的原理――かならずブルジョア階級にたいし全面的独裁をおこない、けっ

して中途でやめてはならないということを胸に深く刻みつけておかなければならない。われわれの一部の同志は組織的には共産党に加入したが、思想的には入党していないという事実を否定することはできない。かれらの世界観は小生産のわくをまだ出ていないし、ブルジョア階級のわくをもまだ出ていない。かれらは、プロレタリア階級のある段階における、また、ある領域における独裁には賛成であり、プロレタリア階級の一部の勝利には喜びを覚えている。というのは、それがかれにある種の利益をもたらすからであり、このような利益が手にはいれば、かれは腰を落ちつけて、自分の安楽な巣をいとなむことができるからである。なにがブルジョア階級にたいする全面的独裁だ、なにが万里長征の第一歩だ、申し訳ないが、そんなことは他の人にやってもらおう、自分はもう終着駅に着いた、下車すべきだ、というわけである。われわれはこれらの同志に勧告する。中途でとまるのは危険だ。ブルジョア階級がさしまねいている。やはり大きな隊列にしたがって、ひきつづき前進しようではないか。

歴史の経験がまたわれわれに教えているように、プロレタリア階級独裁がつぎつぎと勝利をおさめるにつれて、ブルジョア階級もうわべではプロレタリア階級独裁を承認するようなそぶりをみせるが、実際にやっているのは、やはりブルジョア階級独裁を復活させることである。フルシチョフ、ブレジネフはまさにこのようにやってきたのである。かれらは第一にソビエトという名称を変えず、第二にレーニンの党という名称を変えず、第三に社会主義共和国という名称を変えないで、これらの名称の承認を煙幕として、プロレタリア階級独裁の実質的内容をすっかり改め、それを反ソビエト、反レーニン党、反社会主義共和国の独占ブルジョア階級独裁に変えた。かれらは、全人民の国家、全人民の党といった、マルクス主義を公然と裏切る修正主義の綱領をうち出したが、ソ連人民が立ちあがってかれらのファッショ独裁に反対すると、かれらはまたもプロレタリア階級独裁の旗じるしをかかげて大衆を弾圧した。わが中国にも、これに似た事態があらわれている。劉少奇、林彪は階級闘争消失論を宣伝

したばかりでなく、かれらは革命を弾圧するとき、やはりプロレタリア階級独裁の旗じるしをかかげた。林彪には四つの「片時も忘れてはならない」がありではないか。そのうちの一つが「プロレタリア階級独裁を片時も忘れてはならない」である。かれは、たしかに片時も忘れてはいなかった。ただ、それには「くつがえす」というひと言を加えて、「プロレタリア階級独裁をくつがえすことを片時も忘れてはならない」としなければならない。かれら自身の供述で言えば、それは「毛主席の旗じるしをかかげて毛主席の勢力に打撃をくわえる」ということである。かれらは、ときにはプロレタリア階級に「したがい」、はては誰よりも革命的なようにみせかけ、「左」翼的スローガンをうち出して、混乱状態をつくりだし、破壊活動をおこない、経常的には、真っ向からプロレタリア階級に反抗した。社会主義的改造をすすめようとすると、新民主主義の秩序を強固にしなければならないと言う。協同化、人民公社化をおこなおうとすると、時期が早すぎると言う。文学・芸術は革命をおこなわなければならないというと、妖怪劇をすこしぐらい演じても害はないと言う。ブルジョア的権利に制限を加えようとすると、それはよいものだ、拡大しなければならないと言う。かれらはふるい事物を守る専門家であり、ひと群れの蠅のように、一日じゅう、マルクスがのべた旧社会の「母斑」と「欠陥」をめぐってブンブンうなっていた。かれらは、経験のないわれわれの青少年を利用することにとりわけ熱中し、子供たちに、物質による刺激は臭豆腐のようなもので、かぐと大変臭いが、食べるとおいしい、などと宣伝した。そして、かれらはこれらの醜い事をしでかすとき、またつねに社会主義の旗じるしをかかげるものである。投機売買や汚職・窃盗を働く一部の悪党は、自分は社会主義的協業をやっているのだ、といっていたではないか。青少年を毒している一部の教唆犯は、共産主義の後継者に関心をよせ、それを愛護するという旗じるしをかかげていたではないか。われわれは、かれらの手口を研究し、われわれの経験を総括して、ブルジョア階級にたいしより効果的に全面的独裁をおこなわなければ

ならない。

「きみたちは『共産』風を吹かせようというのか」。こうした問題を提起するという方式でデマをとばすのは、一部の連中が最近用いている一種の手口である。これにたいして、われわれははっきり答えることができる。劉少奇、陳伯達が吹かした「共産」風は、けっして二度と吹かすことを許さない、と。われわれは以前から、わが国の商品は多いのではなく、さほど豊富ではないと考えている。人民公社がまだ多くのものを出して生産大隊、生産隊と「共産」をおこなうことができず、全人民的所有制もきわめて豊富な製品を出して八億の人びとに、必要に応じて分配することができないかぎり、ひきつづき商品生産、貨幣による交換、労働に応じる分配をおこなうほかはないのである。そのもたらす危害にたいしては、われわれはすでに制限を加える適切な方法をこうじており、またひきつづきこうじるであろう。プロレタリア階級独裁は大衆による独裁である。われわれは、党の指導のもとにある広はんな大衆は、ブルジ

ョア階級とたたかう力と本領をもっており、最終的にはかれらにうち勝つものと信じている。旧中国は、小生産が大海原のように広がっていた国である。幾億の農民にたいして社会主義教育をおこなうことは、つねに重大な問題であり、数代にわたる努力を必要としている。だが、この幾億農民のうち、貧農・下層中農は多数を占めており、かれらは実践を通じて、共産党にしたがい、社会主義の道を歩むことこそ、かれらにとっての輝かしい大道であることを知っている。わが党はかれらに依拠して、中農を団結し、互助組、初級協同組合、高級協同組合から人民公社へと一歩一歩歩んできたのであり、われわれはまた、かならずかれらを導いてひきつづき前進させることができるであろう。

われわれはむしろ、いま吹いているのは、「ブルジョア」風という別の風であることに、同志たちの注意をうながしたい。それは、毛主席が指摘したブルジョア的生活作風のことであり、例のいくつかの「一部」がブルジョア分子に

変わるよこしまな風のことである。このいくつかの「一部」のうち、共産党員、とりわけ指導的幹部のあいだで吹いている「ブルジョア」風は、われわれにたいする危険性がもっとも大きい。こうしたよこしまな風に毒された一部の人は、頭がブルジョア思想でこりかたまり、名を争い利を求め、それを恥と思わず、かえって光栄に感じている。また、一部のものは、自分を含めて、すべてのものを商品とみなすまでになっている。かれらが共産党に加入し、プロレタリア階級のために仕事をするのは、自分というこの商品の等級をひきあげるためにすぎず、プロレタリア階級に高値で売りつけるためにすぎない。共産党員を名乗ってはいるが、実際にはブルジョア分子にすぎない連中は、腐朽・ひん死の状態にあるブルジョア階級全体の特徴をあらわしている。歴史上、奴隷主階級、地主階級、ブルジョア階級が上昇期におかれていたとき、かれらはまだ人類のためにいくらかよい事をした。現在、このようなブルジョア分子は、まったくかれらの祖先とは反対の側に向かい、人類にたいしてただ破壊的役割

を果たしているにすぎず、完全にひとかたまりの「新しい」ガラクタになっている。「共産」風を吹かそうとしているなどとデマをとばしている連中のなかには、共有財産を私有化し、人民が再びこれらの「財産」を「共有」するのを恐れる新しいブルジョア分子または機に乗じてひともうけしようとする者がいる。このような連中は、われわれの多くの同志よりも敏感である。われわれの一部の同志は、学習は柔軟性をもつ任務だといっているが、かれらは本能的に、今回の学習はプロレタリア階級とブルジョア階級という二つの階級にとって、ともにぜひとも完遂しなければならない任務である、と感づいている。かれらもあるいはほんとうに「共産」風を吹かすか、われわれのあるスローガンをそのまま利用して、故意に性質の異なる二種類の矛盾を混同させ、なんらかの挙に出るかもしれない。これはわれわれの注目に値することである。

毛主席をはじめとする党中央の指導のもとに、わが国の幾億大衆からなるプ

ロレタリア革命の大軍は、いま堂々たる足どりで前進している。われわれは、二十五年にわたるプロレタリア階級独裁の実践的経験をもっており、またパリ・コミューンいらいの国際的経験をもっている。われわれの数百名の中央委員、数千名の高級幹部が先頭に立って、広はんな幹部大衆とともに、真剣に本を読んで学習し、調査研究をおこない、経験を総括しさえすれば、われわれはかならず毛主席の呼びかけを実現し、プロレタリア階級独裁の問題をはっきりさせ、われわれの国がマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想のさし示す道を勝利のうちに前進するのを保証することができるであろう。「**プロレタリアがこの革命のなかで失うものはただ鉄鎖だけである。かれらの得るものは全世界である。**」この限りなく光明にみちた展望はかならず、ますます多くの自覚的な労働者、勤労人民およびその前衛である共産党員が、党の基本路線を堅持し、ブルジョア階級にたいする全面的独裁を堅持し、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命を最後までやりぬくのを、ひきつづき鼓舞するにちがいない。ブルジョア階級とすべての搾取階級の滅亡、共産主義の勝利は、不可避的であり、必然的であって、人びとの意志によって左右されるものではない。

（『紅旗』誌一九七五年第四号より）

ブルジョア階級にたいする全面的独裁について

1975年 初 版 発 行　　定 価 50 円

出 版 者　外 文 出 版 社
（北京阜成門外百万莊）

発 行 者　中 国 国 際 書 店
（北京P.O.Box399）

取 扱 店　東 方 書 店(東京)亜 東 書 店(東京)
中 国 書 店(福岡)(株)内山書店(東京)
(株)満 江 紅(東京)朋 友 書 店(京都)
(株)燎原書店(東京)中 華 書 店(東京)

編号：（日）3050—2635　　3—J—1362P
00015